

平成25年度教師海外研修(ラオス) 研修報告書

学 校 名	浜松市立双葉小学校	氏 名	櫻井 利幸
-------	-----------	-----	-------

1. 印象に残る写真 2 点

●「ナイトマーケットで日本語を学ぶ少年」



ナイトマーケットで話しかけてきた現地の少年。彼は、日本人の観光客に話しかけ、日本語を勉強しているという。このマーケットに2年間通い、流暢な日本語を話していた。学ぶ機会を自ら作っているこの少年の熱意に感動した。

●「未来のラオス代表とバレーボール対決」



バレーボール指導者として活躍している青年海外協力隊の本間さんが指導している子どもたちとバレーボール対決をした。鋭いサーブ・スパイクから技術が向上していることを肌で感じた。将来この子たちの中から代表選手が出てほしいと思った。

2. 現地研修に対する各自の目的 とその達成度

(特に、現地研修の経験を生かす授業実践に資することについて)

グローバルな時代を切り開く使命を担う人間を育てていく教師として、アジア新興国を実際に自分の目で確かめ、現地で生活している人の生の声を聞くことで、自分自身の視野を広げたいと考え本研修に参加した。現地研修の目的を、①ラオスにあって日本にないラオスの良さを見つけること。②ラオスの現状から読みとれる課題に注目し、日本の子どもたちに自分たちのこととして考えさせる資料を集めること。とし、この研修を通して新興国ラオスの理解を図ろうと思った。訪問先では、現地の人や専門家や青年海外協力隊として活躍している日本人の話を聞き、実物や写真、動画などの資料集めをした。①については、盛んに行われている托鉢や礼拝など、ことあるごとに仏や僧侶を敬い、家族のつながりを第一とするラオス人のおおらかな国民性に触れることができた。また、家族の生活の

ために一生懸命働く子どもたちの姿に日本人が忘れかけたたくましさを感じた。②については、戦争が残した爪痕から障害者について知り、医療現場の現状や焼き畑による森林破壊、深刻なごみ問題と多角的にその現状とそれに対する施策を視察することができた。この研修で集めた資料を整理し、学校での授業実践に生かし、文化・習慣の違いを認め合いながら人間として共感をもって新たな合意を形成できる子を育てたいと考える。

3. 訪問国から学んだこと（気づいたこと、わかったこと、大切に思ったことなど）

（１）柱1「訪問国に肯定的に出会う」という観点から

空港に着いたときから「サバイディー」と、手を合わせ迎えてくれるラオス人の人柄の良さが伝わってきた。JICA ラオス事務所の武井所長の話から、ラオス人は感情を表に出したり意見を発言したりしない体質があることを知り、控えめな行動は日本人と良く似ていると感じた。また、この国は、働く人の7割が農業に従事している農業国であり食料自給率も100%を超えているので貧しくても食に困ることはなく、のんびりとした気質がある。ラオスタイムといわれる言葉を研修中よく聞いた。これは予定の時間より30分遅れてから始まるといった意味だった。毎日時間に追われるように働く日本人の私にとっては大きなカルチャーショックだったが研修が進むにつれ、次第に慣れていった。ガイドさんや通訳さんを含め、出会った人全てが穏やかでゆとりがあるラオスの国民性は素晴らしいと感じた。ラオスの子どもたちは皆、生き生きとしていた。家族のために働き、学ぶ意欲に満ち溢れている。「大切なものは」の問いに迷わず「家族」と答える信念をもっている。

（２）柱2「日本と訪問国とのつながりや同一性を理解する」という観点から

ラオスパイロットプログラム環境コンポーネント（LPPE）事業を説明して下さった JICA 専門家の志村さんは、国際協力とはどんな事業もその国の文化や体制の中でどういうことができるかを考えて、よく相手と話し合って実行に移していかなければいけないと説明された。特に実施の条件としていた3つの条件、①ラオス側が強く望む、②終了後もラオス側が継続して運営、③財源（処分料金・収集料金の値上げ・行政の負担）を必ずラオス側が確保する。これらは絶対に必要な条件だと感じた。翌日、LPPE 事業視察をしてエコバスケットを配布する現場に立ち会わせてもらい、プラスチックの袋を使わないでエコバスケットを使う利点をゴミ問題の視点から現地の人たちに熱心に説明する元青年海外協力隊の稲森さんに出会った。ミミズを使ったコンポストの開発も手伝い、現地に合った方法で現地の人を巻き込んで事業を展開している日本人の活躍に感動した。日本の常識や日本でのやり方を押しつけるのではなく、現地で暮らす人々の目線に立ち、現地のやり方と日本で学んだ知識を融合させて、生き生きと活動している姿は国際協力の手本だと感じた。

（３）柱3「共通の課題について共に考え・共に越える」という観点から

地球温暖化の問題は、ラオスだけではなく人類共通の課題である。伝統的に焼き畑を行い、森林を農地としてきた人たちに農地を管理することで森林減少を食い止める技術協力プロジェクトを行っているのが JICA 専門家の西村さんだ。もともと農地を管理するという習慣が無く、好きなところで焼き畑を行ってきたラオスの人々に航空写真や地図を使ってどこに畑を作るのか住民自身に決めさせ、新規に森林を伐採することなく循環型の畑作に誘導させる仕事を彼はしていた。十分な教育を受けていない住民には、焼き畑をすることで二酸化炭素がでること。森林が無くなることで光合成が行われず、二酸化炭素が減らないこと。などを理解させるのは難しいことだと感じた。しかし、熱心に

これらの活動を続けることで、次第に住民から理解を得られるようになっていた。台風による雨で、実際に植林されている現場は見られなかったが、村のリーダーの「規範ができて森林を管理しやすくなった。」という言葉にその成果が表れていると感じた。

4. JICAの国際協力事業の「良い！と思ったところ」と「今後あるといいなと思う視点」

JICAの国際協力事業の良いところは、現地の人々と十分に話し合い、住民の視点に立って行われているプロジェクトが多いところ。森林減少抑制のための参加型土地・管理プロジェクトを例にとってみても村人と話し合い、パイロットアプローチを行い、計画を立てる。計画が決まったらモニタリングを行い、軌道に乗ることを確認してから実行に移す。このように考えられた事業であること。今後あるといいなという視点は、障害者の視点であると考ええる。

今回は、ベトナム戦争の際の不発弾や地雷、ポリオによる発症で車椅子生活になった人たちとのバスケット交流や聴覚障害者自立施設の見学が盛り込まれた。しかし、多くの国の場合、障害者への支援は最後となる。

逆に考えれば、障害者への支援が充実してくれば、自ずと健常者への支援も進むと考えられる。人権教育が進んでいる日本での事例にヒントを与えるような国際協力事業をもっと展開していても良いと考える。

5. 来年度参加する先生へのアドバイス（持ち物、必要な準備、学びの視点、注意事項など）

訪問地でのタブーは予め、知識としてもっていた方が良いと感じた。今回の訪問では、現地ガイドが「ここは写真を撮っても良い。ここは靴を脱ぐ。」など詳しく説明してくれて、とても助かった。ラオスの人々は温厚な人柄の人が多いのでほとんど問題はなかったが、特に注意が必要なのが地方の村の風習の理解だ。少数民族の村では、犬を食べる習慣がある。市場の魚や肉類もそうだが、日本では考えられないくらい衛生状態は良くない。出されたものは食べないと失礼にあたるので、食事をもてなされそうな場合、食事になる前に早めにその場を立ち去る方が無難だと思う。また、お土産として教材を持ち帰るので、日本を出発するときの荷物は15kg以下が適当。（20kg制限があるので）こちらから現地の方へのお土産を持っていくのでそのスペースに教材が入ると考えると良い。

6. その他全般を通じての感想・意見など

この研修で最も印象に残ったのはルアンプラバンのナイトマーケットで出会った少年だ。この少年の行動にラオスの課題と今の日本人に足りないものが凝縮されていると感じた。この少年は、日本語を学ぶために旅行者が集まるナイトマーケットで日本人に話しかけて日本語の勉強をしていた。現在、彼は独学で2年間マーケットに通い、日本語を話せるようになったという。教育の場を自ら作り出している少年の熱意に感動すると共に、そうせざるを得ないラオスの現状を見た気がした。発展途上のラオスでも貧富の差が広がっている。高等教育を受け、大学に進む可能性があるのは首都に住む裕福な家庭の子どもたちだけだ。この研修で多くの働く子どもたちに出会ったが、皆、家族のため生きるために一生懸命働いていた。この国の課題は万遍なく平等な教育をすべての子どもたちに与えることだ。また、誰にもチャンスがある日本の子どもたちは幸せだと思う。今後は外国の現実を伝えることで自分たちの生き方を振り返らせたいと考えている。

以上